

青塚美穂

「超  
限定能力」

登場人物

秋山舜太郎 (21) 大学四年生

齊藤宜秀 (22) 大学四年生。舜太郎の友人

橋田美雪 (14) 私立中学生

秋山健太郎 (50) 舜太郎の父

秋山百合子 (46) 舜太郎の母

ゼミの教授

老婦人 1

老婦人 2

面接官

見舞い客 1

見舞い客 2

乗客の男

乗客の女

OL

サラリーマン

駅員

車掌アナウンス

○メインタイトル

『超限定能力』

○駅のホーム（朝）

通勤電車が入ってくる。

○同・電車（朝）

通勤ラッシュで混み合う車内。

電車に乗り込む舜太郎。

パーカーにリュック、スニーカーとラ

フな格好の舜太郎。見るからに大学生。

座席に座り、文庫本を読んでいるサラ

リーマンの前に立つ舜太郎。

ギユウギユウ詰めの中。隣に立つお

じさんに寄りかかれ、うんざり顔。

車掌アナウンス「次は新松戸→新松戸です」

電車が緩やかに速度を落とす。

サラリーマンが読んでいた文庫本を閉

じて鞆にしまう。

それを見た舜太郎、おじさんを押し返

しながら、サラリーマンの前の位置を  
死守する。

舜太郎「……（座るのは俺だ！）」

電車が次の駅に止まる。

ドアが開くが、下車する客はまばら。

サラリーマン、そのまま目を閉じて小

さくいびきをかき始める。

舜太郎「……（何だ、降りないのかよ！）」

ガックリうなだれる舜太郎。

隣のおじさんが再び寄りかかってくる。

舜太郎「……」

発車のベルが鳴る。

うんざりした顔で手すりをつかみ直す

舜太郎。

走り出す電車。

舜太郎 M「このお分後、俺はエスパーにな  
った」

○走る電車・車内（朝）

立ったままウトウトし始める舜太郎。

舜太郎「ねみい……」

誰か降りそうな人がいないかと座席に座っている乗客を見渡す。

スマートフォンに夢中のOL。

イヤホンで音楽を聴いている高校生。

寝ているサラリーマン。

誰も降りそうな気配がないことにガツカリする舜太郎。

舜太郎N「ああ、だりい。何でもいいから座りたい！」

その瞬間、ものすごい金属音とともに急ブレーキがかかる。

舜太郎「うおっ！」

立っている乗客たちが一斉になだれる。

弾みで隣のおじさんにのしかかられ、

仰向けに倒れる舜太郎。

そのまま床に頭を強く打ちつける。

気絶する舜太郎。

× × ×

乗客の男の声「おい、大丈夫か？」

その声に、うつすらと目を開ける舜太郎。

舜太郎の顔を覗き込んでいる男の顔がぼんやりと見える。

舜太郎、起き上がろうとするが、男に止められる。

乗客の男「頭打ってるみたいだから、動かない方がいい」

舜太郎「……？」

男の頭上に何かフワフワしたものが浮かんでいるのが見える。

だんだん焦点が合ってくる。

舜太郎「……しんおちやのみず？」

乗客の男「新御茶ノ水で降りるのか？　じゃ

あ私と一緒にだ」

舜太郎「いや、そうじゃなくて……」

舜太郎、目を凝らす。

男の頭上に【新御茶ノ水】の文字が浮かんでいる。

目をこするが、【新御茶ノ水】の文字

は消えない。

乗客の男「でも、君は次の駅で降りた方がいいな。念のため病院で診てもらったら」

舜太郎「はあ……」

○総合病院・検査室

MRIを撮っている舜太郎。

○病院・外観

大きな総合病院。

○同・正面入口

頭をさすりながら出てくる舜太郎。  
頭にはガーゼ。

○東都大学・カフェテリア

学食のラーメンをすすっている舜太郎。  
その向かいに、どさっとリクルート靴  
が置かれる。  
顔を上げると、スーツ姿の斉藤宜秀

(22)の姿。

舜太郎「おお、ノブ！」

宜秀「お前、どうしたんだよ。その頭」

舜太郎「今日MRIやったんだよ」

宜秀「なんで？ 頭悪いのか？」

舜太郎「それだと俺が頭悪い子みたいだろ！

今朝、ちよつと頭打ったんだよ」

宜秀「どこで？」

舜太郎「電車。異常なしだったけど」

宜秀「良かったじゃん」

そう言って、向かいの席に座る宜秀。

舜太郎、ちよつと深呼吸して、

舜太郎「それがさ、なんか変なものが見えん

だよ」

宜秀「なにが？ 幽霊とか？」

舜太郎「駅名」

宜秀「は？」

舜太郎「駅名が見えるんだよ。人の頭の上

に……」

心配そうな顔の宜秀。



宜秀「お前やっぱり……」

舜太郎「異常はないって！」

宜秀「俺の頭の上にも見えるのか？」

宜秀の頭上には何も無い。

舜太郎「いや、何も見えない」

宜秀「錯覚じゃないのか？」

舜太郎「電車乗ってる時には見えただ」

宜秀「ふくん」

舜太郎「信じてないだろ？」

不貞腐れた表情の舜太郎、ラーメンをすすする。

○郊外の街並み（朝）

○秋山家・外観（朝）

立派な門構えの日本家屋。

表札「秋山」と掲げられている。

○同・キッチン・リビング（朝）

秋山百合子（あき）がキッチンで朝食を

作っている。

リビングでは新聞を読んでいる秋山健太郎（50）。スーツ姿でコーヒーを飲んでいる。

○同・舜太郎の部屋（朝）

目覚ましは鳴っているが、しぶとく寝続ける舜太郎。

百合子の声「舜ちゃん。早く起きなさい！」

舜太郎「うん」

寝返りを打つが起きない。

○同・階段（朝）

ボサボサ頭で降りてくる舜太郎。

○同・リビング（朝）

百合子が洗い物をしている。

健太郎はすでにいない。

百合子「目覚ましの意味ないわね。寝過ぎ

よ」

舜太郎「あ、あ、あ」

舜太郎、声を出しながら喉をなでる。

舜太郎「やっぱ5時間は歌い過ぎか」

百合子「またカラオケ？ お父さんの会社に入ったら、そんなに遊ぶ暇ありませんからね」

テーブルの上、スクランブルエッグにサラダ、フランスパン、オレンジジュースの朝食が並んでいる。

舜太郎、オレンジジュースを一気飲みする。

○同・玄関（朝）

舜太郎、スニーカーを履いて立ち上がる。ドアを開けて出て行く。

○駅のホーム（朝）

舜太郎があくびしながら電車を待つている。

○走る電車内（朝）

混雑している車内。

舜太郎、座席に座っている乗客に目を走らせる。

老若男女、さまざまな乗客たち。

舜太郎、ドア近くに立つ。

斜め前のサラリーマンの頭上には、

【綾瀬】の文字が見える。

正面の女子高生の頭上にも同じように

【亀有】の文字が浮かんでいる。

車掌アナウンス「次は亀有く亀有く」

電車が亀有駅に止まる。

正面にいた女子高生が降りて行く。

舜太郎「……」

× × ×

車掌アナウンス「綾瀬く綾瀬く」

舜太郎の斜め前のサラリーマンが降りて行く。

舜太郎「……」

宜秀の声「どの駅で降りるかが分かるに」

○東都大学・キャンパス内

並んで歩いている舜太郎とスーツ姿の

宜秀。

宜秀は呆れたような驚いたような顔で

舜太郎を見ている。

舜太郎「たぶん間違いない」

宜秀「舜、大丈夫か？」

舜太郎「全然だいじょうぶだよ！俺は正気

だからな！」

宜秀「どこがだよ」

そういつて笑い合う2人。

宜秀のリクルートスーツ姿を見て、

舜太郎「そーいや二次面接だったけ？」

宜秀「割とイケたと思うけど、どうだろな」

ため息をつく宜秀。

舜太郎「なんだよ、暗いじゃん」

宜秀「この時期で内定なしなんだ。ヤバすぎ  
てやってらんねえよ」

舜太郎「じゃあさ、ダーツでもやりに行こ

う。気分転換に」

呆れ顔の宜秀。

宜秀「気分転換するほど追い詰められてない

だろ、おまえは」

舜太郎「いいじゃん、行こうよ」

宜秀「お前な、そんな状況か？　いくら就職

率上がってきたからって、俺達みたいな三

流大学じゃ、厳しいことにはかわりないん

だぞ？」

舜太郎「俺はバイトでもしながら気ままに暮

らそつかなあ。ノブもそうしろよ」

宜秀「いいよな舜は。どんなに遊んだって、

最終的には実家継げばいいんだからよ」

宜秀、暗い顔でうつむく。

宜秀「疲れた……」

舜太郎「なあ、次の講義サボってさ、行こう

よ、ダーツ！」

宜秀「……」

宜秀、そのまま舜太郎を置いて行って

しまう。

舜太郎「つまんねえの」

○ゲームセンター・外観

繁華街にあるゲームセンター。制服姿の高校生や大学生などで賑わっている。

○同・店内

ダーツのコーナーで一人、黙々とダーツを投げている舜太郎。

○繁華街（夜）

カラオケ店の客引きに声をかけられ、そのまま店内に入っていく舜太郎。

○駅のホーム（深夜）

時計は夜の二時五分。

終電間際のホームには飲み会帰りらしいサラリーマンの団体や若い男女のグループでいっぱい。

乗車の列に並んでいる舜太郎、のど飴を取り出し、口に入れる。  
電車がホームに入ってくる。

○走る電車内（深夜）

泥酔しているサラリーマンの前に立っている舜太郎。

車掌アナウンス「次は西日暮里、西日暮里」

舜太郎、サラリーマンの肩を揺らして起こす。

舜太郎「着きましたよ」

寝ぼけているサラリーマン、慌てて降りて行く。

その席に座る舜太郎。

ホームでは、さっきのサラリーマンが「なんで降りる駅知ってるんだ？」という顔で舜太郎を見ている。

動き出す電車。

座席に座ってゆったりと目を閉じる舜太郎。



舜太郎 M 「とは言っても、別に予知能力ってわけじゃない」

○大学・大講堂

講義を受けている学生たち。その中に舜太郎の姿。

ゼミの教授「抜き打ちテストするぞ」

舜太郎「え！」

蒼ざめた顔の舜太郎。

テスト用紙が配られるが、全然答えを書けない。

舜太郎 M 「あゝ、予知能力があれば！」

頭をかきむしる舜太郎。

舜太郎 M 「電車内限定のささやかな超能力。非力なエスパー」

○走る電車・車内

座席に座って、スマートフォンを弄っている女性に目を留める舜太郎。

舜太郎「……」

立っている乗客の間を縫って、その女性の前に陣取る。

舜太郎の前に座っていた女性が立ち上がり、電車を降りて行く。

すかさず、その空いた座席に座る舜太郎。

その横では、女性同士が空いた座席をイス取り合戦のように争っている。

満員電車のなかでもゆったりと座って目を閉じる舜太郎。

舜太郎 M「ささやかだけど、意外に便利」  
にんまり顔の舜太郎。

## ○ 駅

複数の路線が乗り入れる駅。

ホームには乗車待ちの列ができている。

そこへ電車がホームへ入ってくる。

ドアが開くと、弾けるように乗客が降りてくる。

降車と乗車の客でごった返すホーム。

○同・電車内

ドアが開いて、乗客が乗ってくる。

その中に二人連れの老婦人がいる。

老婦人たちは舜太郎の目の前に立つ。

舜太郎、薄目で老婦人を見ながらも、

そのまま無視して目を閉じる。

老婦人1「いやあね、若いのに」

目を閉じたままの舜太郎。

老婦人2「本当にね、譲るってことを知らないのかしら」

舜太郎、周囲の座っている乗客たちを

ざっと見渡す。

舜太郎「あ、あそこの人」

斜め向かいの中年男性を指差す。

舜太郎「次の駅で降りますから、あの人の前

に立ってたら？」

老婦人1「デタラメ言って」

そのまま、目を瞑る舜太郎。

車掌アナウンス「次は北千住、北千住です」

立ち上がる中年男性。

老婦人たちが驚いた顔で舜太郎を見る。

得意気な顔の舜太郎。

○都内・ビジネス街

大手企業のビルが立ち並ぶ。

○高層ビル・外観

たくさんの企業が入っているビル。

○同・会議室

リクルート姿の学生たちが大勢座っている。

皆、緊張した面持ち。

その中に宜秀の姿。

○同・面接会場

学生5人、面接官5人の集団面接。

面接官「では、次に斉藤宜秀さん」

宜秀「はい！」

立ち上がり、自己紹介、志望動機を話し始める。

緊張から、どんどん早口になっていく。

○同・エレベーター前

暗い顔でエレベーターを待っている宜秀。

その時、スマートフォンのバイブがメールの着信を知らせる。

宜秀「……」

おそるおそるメールを開封する。

「不採用通知」の文面。

宜秀「……」

エレベーターが到着する。

他の面接受験者たちがエレベーターに乗り込む。

エレベーターのドアが閉まる。

その場に立ちすくんだままの宜秀。

スマートフォンを持つ腕が、だらりと垂れ下がっている。

○ 駅のホーム（朝）

電車を待っている乗客の列。

その最後尾をあくびをしながら待っている舜太郎。

○ 走る電車内（朝）

座っている舜太郎。

何気なく、目の前に立つサラリーマンを見る。

舜太郎「？」

舜太郎、目を凝らすが、そのサラリーマンの頭上には駅名も何も見えない。

舜太郎「……」

隣に座る男子高校生、向かいに座っている老人など、車内の乗客に目を走らせる。

どの乗客の頭上にも、降りる駅名が浮かんでいる。

舜太郎、もう一度、目の前のサラリー

マンを見る。

頭上には何も見えない。

舜太郎 M「こんなのは初めてだ」

じっとサラリーマンの顔を見つめる。

サラリーマンは目を瞑ったまま、微動だにしない。顔色は悪く、うなだれている。

車掌アナウンス「次は大手町」

スッとサラリーマンが動き、電車を降りて行く。

舜太郎「……」

サラリーマンを追いかけて、一緒に電車を降りる舜太郎。

人混みに紛れながら、ゆらゆらとした足取りで歩くサラリーマン。

その後をつける舜太郎。

乗り換えの改札を抜け、別の路線のホームに辿り着く。

ホームに入ってくる電車。

サラリーマンの後姿。

見つめる舜太郎。

次の瞬間、サラリーマンが線路へと飛び降りる。

舜太郎「！」

急ブレーキの音。

人々の悲鳴。

どよめくホーム。

舜太郎「……」

呆然と立ち尽くす舜太郎。

「人身事故よ！」「やだ、飛び込む瞬間見ちゃった！」などの言葉が飛び交う。

駅員が集まってくる。

舜太郎「……」

舜太郎、人混みを抜けて、来た道に戻る。

次第に早足に、最後は走り出す。

○大学・図書館・外観

構内にある別館の図書館。



○同・内

図書館の窓から、ぼんやりと外を見つめている舜太郎。

隣の席に宜秀が座る。

リクルートスーツ姿の宜秀。

宜秀「珍しいな、こんなところにいるなんて」

舜太郎「……」

宜秀「相変わらず、就活生とは思えない格好だな」

宜秀、伸びたTシャツにジーンズのラフな服装の舜太郎を見てため息をつく。

舜太郎「……見えなかった」

宜秀「ん？」

舜太郎「今日さ、駅名が見えないおじさんがいたんだ」

宜秀「ああ、お前の地味に便利な特殊能力の話？」

舜太郎「俺、考えたんだけど……あれはきっと、透視に近い能力なんだと思う」

黙って聞いている宜秀。

舜太郎「どの駅で降りよう、あの駅で乗り換えだ、とか。そういう思念みたいなのが見えてるんだよ、きっと」

宜秀「降りようと思う駅の思念だけ見えるってのも可笑しな感じだよな。どんだけピンポイントなんだよ」

小さく笑う宜秀。

笑わない舜太郎。

舜太郎「もうどこにも行き先がなかったら？」

宜秀「え？」

舜太郎「もう、どこにも行きたくなかったんだ、あの人……」

○フラッシュバック

目を瞑ったままのサラリーマン。

人混みに紛れながら、ゆらゆらとした足取りで歩いている。

○元の大学・図書館・内

怪訝な顔で舜太郎を見つめる宜秀。

舜太郎「だから、駅名が見えなかったんだ」

宜秀「……」

舜太郎「行く場所がなかったんだ」

うつむく舜太郎。

宜秀「……お前、何を見たんだ？」

舜太郎「見てないよ。何も見てない」

宜秀「……」

舜太郎「死ぬときって一瞬なんだな」

ハツとした表情の宜秀。

○電車内（夜）

立っている舜太郎。

流れて行く景色を眺めている。

舜太郎「……」

舜太郎の前の座席が空く。

座らない舜太郎。

横からやってきた若いOLが座る。

○ 走る電車（朝）

○ 同・車内（朝）

ぼんやりと車窓を眺めている舜太郎。  
電車が駅のホームに入る。降りる準備  
をしてドア付近に集まる乗客たち。  
そのなかに一人、頭上に駅名がない人  
間がいるのに気づく。

舜太郎「！」

それは女子中学生だった。  
おとなしそうな容姿、口をギュッと結  
び、表情の読めない顔。  
舜太郎、追いかけてしようとすも、その  
鼻先でドアが閉まってしまふ。

舜太郎「……」

人ごみに消えていく女子中学生の小さ  
な背中。  
動き出す電車。

○ 走る電車・内（朝）

うつむく舜太郎。

車掌アナウンス「ただいま、日暮里駅におきまして人身事故が発生しました」

舜太郎「！」

アナウンス「救出活動を行ったのち、安全確認をいたします」

車内に缶詰になっている乗客たちから、ため息と小声の文句がこぼれる。

会社に遅刻の電話をする人、ツイッタ―でつぶやく人、あからさまにイライラし始める人。

車掌アナウンス「運転再開の目処はたっておりません。お急ぎの皆様には大変ご迷惑おかけしますが、しばらくこのままお待ちください。なお、振替輸送も行っておりますので……」

ざわつく乗客たち。

乗り換え検索をしている彼らの頭上の駅名が、次々に変わる。

舜太郎「……」

じっと立ったまま呆然としている舜太郎。次第に息が荒くなってくる。耳鳴りがして、思わずその場にうずくまる。

○大学・外のベンチ

ベンチに座り、パンを食べようとする舜太郎。

一口かじって、そのまま食べるのをやめる。

スーツ姿の宜秀がまっすぐに舜太郎のところへやってくる。

宜秀「今朝の人身事故のせいで最終面接に遅れた。ツイてないよ、ほんと」

舜太郎の隣に座る宜秀。

舜太郎「……」

宜秀、缶ジュースを開けて飲み始める。

宜秀「どうした」

舜太郎「皆さ、人身事故ってアナウンス聞いたら、一斉にため息つくんだよな」

宜秀「そりゃ、そうだろ」

舜太郎「『たった今、人が死にました』って  
言ってるんだぞ、あれは」

宜秀「……」

舜太郎「みんな、冷たいんだな。他人事だと  
思ってる」

宜秀「……」

舜太郎「どいつもこいつも、文句ばかり。  
ちよっと会社に遅れるくらい、いいじゃん  
別に。もっと大事なことなんじゃないのか、  
あれは」

宜秀、黙ったまま舜太郎の顔を見つめ  
る。

宜秀「舜さ、お祈りされたことあるか？」

舜太郎「お祈り？」

宜秀、自嘲気味に笑う。

宜秀「残念ながら、今回は採用を見送らせて  
いただくことになりました。末筆ながら、  
貴殿の今後のご活躍を心よりお祈り申し上  
げます」

舜太郎「……」

宜秀「不採用通知のことだよ」

宜秀、笑う。

宜秀「お祈りメールっていうんだ。面白いだろ？」

舜太郎「ノブ……」

宜秀「何を祈ってんだろうな」

じっと宜秀の様子をうかがう。

宜秀「……お前には分からないよ」

宜秀の手が小さく震えている。

宜秀「何十社も受けて、何十回も、下手したら100回以上、心にも無いお祈りをされる

気持ち、お前に分かるか？」

舜太郎「……」

宜秀「死にたくなるんだよ」

息をのむ舜太郎。

じっと宜秀の顔を見つめる。

宜秀「お前は、死にたくなるような思いなんて、したことないだろ」

舜太郎「何だよ、それ」



宜秀「就活してれば死にたくなる瞬間もある。何もしないで、毎日のほほんとしてる。そんなお気楽な奴に、偉そうなこと言えんのか？」

舜太郎「……」

宜秀「自分だって冷たい人間のひとりだっただろ。就活してる俺の横で余裕かましやがって。お前だって十分冷たい奴だよ！ 周りが冷たいなんて言える人間か？」

舜太郎「……」

唇を噛みしめ、勢いよく立ち上がる舜太郎。そのまま去って行く。

宜秀「……くそっ」

○ 繁華街のゲームセンター

入っていく舜太郎。

○ 同・店内

ひたすらダーツを投げ続ける舜太郎。

○同・ボーリング場

舜太郎、友人たちとボーリングをしている。

ストライクを出し、ハイタッチしながら喜んでいる。

舜太郎「ちよっとトイレ！」

ひとり、トイレに向かう舜太郎。

○同・男子トイレ

舜太郎、顔を洗っている。

舜太郎「忘れろ……！忘れろ……！」

そこへ、男子トイレに入ってくるサラ

リーマンの男性が鏡越しに見える。

舜太郎「！」

一瞬、自殺したサラリーマンに見えて、ハッと振り返る舜太郎。

頭を振りながら、鏡に映る自分の顔を見つめる。

○同・ボーリング場

舜太郎が戻ってくる。

舜太郎「次行こ！ 次！」

○カフェ・店内（夜）

筆記試験の問題集を解いている宜秀。

スマートフォンを見ると、メールが届いている。

宜秀、深呼吸して、メールを開封する。そのメールには、「残念ながら、今回は貴意に沿うことができませんでした。末筆ながら、今後のご活躍をお祈り申し上げます」の文字。

宜秀「……」

スマートフォンが宜秀の手から滑り落ちる。

○カラオケ店・部屋（夜）

マイク片手に熱唱している舜太郎。

友人たちとバカ騒ぎしている。

舜太郎のリュック、ポケットの中でスマートフォンを着信を知らせるランプが光る。  
画面には「ノブ」の文字。  
着信ランプ、長いこと光ってから、消える。

### ○秋山家・舜太郎の部屋

時計の針、二時を指している。  
洋服のままベッドで寝ている舜太郎。  
スマートフォンが鳴っている。

舜太郎「んゝ」

寝返りを打ちながら、スマートフォンに手を伸ばす。

舜太郎「なんだよ……」

舜太郎、通話ボタンを切って、再び寝ようとする。

またすぐ鳴り出す。

舜太郎、今度は通話ボタンを押す。

舜太郎「もしもし？」

寝ぼけ声の舜太郎。

舜太郎「……うん、うん。……は？」

起き上がる舜太郎。

舜太郎「もう一回、言ってくれ……」

舜太郎、じつと電話の相手の声に耳を  
傾ける。

舜太郎「もう一回……」

頭を抱える舜太郎。

舜太郎「……いや、もういい」

### ○ 大学病院

雨が降っている。

見舞いや外来に訪れた人々。

その中に舜太郎の姿。

### ○ 同・病室前

病室のドアに手をかけたまま、固まる

舜太郎。

舜太郎「……」

その時、中から人が出てくる。

咄嗟に廊下の影に隠れる舜太郎。

病室から出てきた人の会話が途切れ途

切れに聞こえてくる。

見舞い客1「受けた会社、全部落ちたそうよ」

見舞い客2「だからって何もねえ……」

見舞い客1「真面目すぎたのね……」

舜太郎「……」

舜太郎、そのまま病院を出て行く。

## ○道路

小雨が降るなか、線路沿いの道を歩いている舜太郎。

上着のポケットからスマートフォンを取り出す。

舜太郎「……」

思い切って、伝言再生のボタンを押す。

留守電の声「ただいま4件の伝言をお預かりしています」

続けて、ピーという電子音が鳴る。

留守電の声「伝言、1件目」

宜秀の声「あ、舜？ あー、あのさ……」

と言ったきり、黙ったまま。

ピー、と電子音が入り、再生が終わる。

留守電の声「2件目」

宜秀の声「この間は悪かったよ。言い過ぎ

た」

ノイズ混じりに聞こえる宜秀の声。

舜太郎の目から涙があふれる。

宜秀「あの時、お前、言ったよな……」

ピー、と電子音が入り、再生が終わる。

留守電の声「3件目」

宜秀の声「どこにも行くところがない……だから

駅名が見えなかったって」

立ち止まる舜太郎。

舜太郎の上着、雨に濡れて、漆黒にな

っている。

近くの踏切の遮断機が降り、カンカン

カン……と信号が鳴り始める。

留守電の声「4件目」

舜太郎「……」

じっと耳を澄ませる舜太郎。

宜秀の声「いま俺と一緒に電車乗ったら」

舜太郎「……」

宜秀の声「……きつと……見え……」

踏切の音が大きくなる。

電車が通り過ぎる轟音。

舜太郎「ノブ……！ ノブ、ごめん！」

その場にうずくまる舜太郎。

その横を通り過ぎていく電車。

その場から動かない舜太郎。

舜太郎「ごめん」

○駅の改札（朝）

たくさんの通勤・通学客がいる。

舜太郎、覚悟を決めた顔で改札を通る。

○同・電車内（朝）

最後尾の車両から最前列の車両まで、

乗客たち一人ひとり見ながら歩いてい

る舜太郎。



駅名が見えない人はいない。

ホッとする舜太郎。

○別の路線・走る電車（朝）

○同・車内（朝）

同じように、すべての車両を移動しながら、頭上に駅名が見えない人がいなか探している舜太郎。

○また別の路線・電車内

一人ひとり、観察しながら歩いている

舜太郎。

舜太郎「あ！」

ドアのすぐ近くに立っている若いOL。

その頭上に駅名は浮かんでいない。

舜太郎、急いでOLに駆け寄る。

舜太郎「あの！ 早まったことはしないでください！」

驚いた顔のOL。

○L「え、なに？」

舜太郎「ダメです！ 生きてください！」

○L「やめて、何なんですか？」

舜太郎、なおも○Lに話しかけよう

とする。

サラリーマン「おい、やめろ！ 困ってるじ

やないか」

○駅ホーム（朝）

通勤電車が入ってくる。

ドアが開き、中から舜太郎が屈強そう

な男に首根っこを掴まれながら降りて

くる。

舜太郎「違いますって！ 痴漢じゃないです」

ズルズル引っ張られていく舜太郎。

舜太郎「これには訳があるんです！」

身柄を駅員に引き渡される。

舜太郎と同じ車両の乗客たちが降りて

きて、人だかりをつくっている。

そこに向かって叫ぶ舜太郎。

舜太郎「頼むから、死なないで！」

怪訝な顔で舜太郎を見る人々。

○L「……」

引きずられていく舜太郎。

○駅・駅員事務室・内

駅員にお説教されている舜太郎。

駅員「じゃあ、痴漢はしてないんだね？」

舜太郎「してません！　ただ、彼女のために

……！」

駅員「彼女のためって、どういうこと？」

舜太郎「それは……その……」

言いよどむ舜太郎。

○駅のホーム（朝）

真剣な顔の舜太郎。

電車がホームに入ってくる。

乗り込む舜太郎。

○走る電車内（朝）

最後尾から車両移動しながら、自殺者がいないか見ている舜太郎。

その時、頭上に駅名の見えない人を見つける。

舜太郎「……」

乗客の間を縫って、慎重に近づく舜太郎。

制服姿の女子中学生の姿。

隣に立って、そっと顔を見る舜太郎。

舜太郎「え……」

それは、先日見かけた女子中学生（橋

田美雪）だった。

舜太郎「……」

以前と同じように生氣のない表情の美雪。

その横顔を見つめる舜太郎。

電車が駅に着く。

降りて行く。

その手を掴もうとするが、降りようとする別の乗客によって阻まれてしまう。

○ 駅のホーム

前を歩く美雪。

その後ろから追いかけてくる舜太郎。

舜太郎「待って！」

美雪、そのまま歩き続ける。

舜太郎「お願い、待って！」

次の瞬間、反対の線路に飛び込む美雪。

その時、アナウンスが流れる。

駅員アナウンス「まもなく1番線に電車がまいります。黄色い線までお下がり下さい」

電車接近を知らせる電光表示板。

舜太郎「誰か非常停止ボタン押して！」

と叫びながら、ホームに飛び降りる舜太郎。

○ 同・ホーム下

倒れている美雪の体を抱きかかえて、ホーム下の隙間に引っ張ろうとする。どんどん近づいてくる電車。

ゴォーという音が次第に大きくなる。

何とか美雪をホーム下に引っぱろうとする舜太郎。

なかなか思うように動かない。

乗客の女「頑張って！」

ホームに引き上げようと、手を差し出す男性たち。

駅員「危ないから下がって！」

電車が警笛を鳴らしながらホームに入ってくる。

電車の轟音。

悲鳴。

○同・ホーム上

駆け付けた駅員がホーム下を照らす  
が暗くて見えない。

ゆっくりと電車を移動させる。

駅員「おい、いるか？」

客たちが固唾をのんで見守っている。  
祈るように手を合わせる人々。

乗客の女「あそこ！」

女が指差す先、ホーム下から手が出て  
いる。

その手が、サムズアップのかたち。

拍手と歓声に沸くホーム。

○ホーム下

美雪を抱きかかえた舜太郎。

舜太郎「ノブ、みんな冷たくなかなかつた  
よ」

○駅・駅員室・前

駅員室から出てくる舜太郎と美雪。

美雪、舜太郎に頭を下げる。

美雪「助けてくれて、ありがとうございます  
た」

美雪の顔は暗いまま。

舜太郎「……」

美雪の手を取り、引っ張っていく舜太  
郎。

美雪「え？」

○ 駅の歩道橋

舜太郎、驚く美雪をグイグイ引っ張っていく。

美雪、訳が分からないといった表情で舜太郎を見つめる。

舜太郎「あのさ……」

立ち止まる舜太郎。

美雪「……」

舜太郎「どこか行きたいところない？」

美雪「え……」

舜太郎「どこでもいいから。行きたいところ、ない？」

○ 遊園地

観覧車、ジェットコースター、お化け屋敷のある園内。

○ 同・ジェットコースター



先頭に乗っている美雪と舜太郎。  
ゆっくりとレールを上っていく。

笑顔の美雪。

真っ青な舜太郎。

頂点まできたジェットコースターが一  
気に落ちる。

両手を上げて歓声をあげる美雪。

半泣き状態の舜太郎。

○同・コーヒークップ

一緒にコーヒークップの乗り物に乗っ  
ている舜太郎と美雪。

グルグルと容赦なく回す美雪。

目が回っている舜太郎。

楽しそうな笑顔の美雪。

目を回しつつも、ホッとした顔の舜太  
郎。

○同・ベンチ（タ）

座っている美雪のもとに、ソフトクリ

ームを2つ持った舜太郎が来る。

美雪、笑顔で受け取る。

美雪「ドラマの中のデートっぽくい！」

はしゃぐ美雪を嬉しそうに見つめる舜

太郎。

ベンチに並んでソフトクリームを食べ

始める。

舜太郎「絶叫系、好きなんだね」

美雪「あくスッキリした！」

舜太郎、美雪の横顔を見つめる。

舜太郎「何かあったの？」

美雪「……」

黙ったまま、ソフトクリームを食べ続

ける美雪。

舜太郎「ごめん、言いたくなかったら……」

美雪「私、私立の高校行ってるの」

舜太郎「うん」

美雪「学費高くてさ」

舜太郎「うん」

美雪「お母さんは、出ていった」

舜太郎「そっか」

2人の前を親子連れが楽しそうに歩いていく。

美雪「私だけは、お父さんの味方でいようと思ってた。でもリストラされて……」

美雪、不意にうつむく。

美雪「私がお父さんの重荷になってるの」

舜太郎「そんな事……」

美雪「あるの。そんな事あるの！」

舜太郎「……」

美雪「バイトばかりしてたら成績も落ちるし、一緒に遊べないから友達もどんどん離れていっちゃうし、もう家にも学校にも、どこにもいたくなかった！」

美雪のソフトクリームがどんどん溶けていく。

美雪「しんどい……」

溶けたソフトクリームが地面に落ちて、小さな染みをつくる。

舜太郎「……」

美雪の頭をそつと撫でる。

美雪「そう思ったら、消えなくなった……」

舜太郎「……消えないでよ」

美雪「……」

舜太郎「消えないで」

美雪、声をあげて泣き出す。

ベンチに座り続ける2人。

○駅のホーム（夜）

並んで電車を待っている舜太郎と美雪。

電車がホームに入ってくる。

○走る電車・車内（夜）

舜太郎、隣の美雪をなかなか見られな  
い。

思い切って、美雪の方を向く。

美雪の頭上に【我孫子】の文字が浮か  
んでいる。

舜太郎「……」

舜太郎、もう一度だけ美雪の手を握り

締める。

少し赤い顔の美雪。

美雪「今日はありがとう。何か軽くなった！

カウンセラーの人……じゃないよね？」

照れくさそうに笑う舜太郎。

○歩道橋（夜）

ひとり歩く舜太郎。

舜太郎「カウンセラーか」

その時、舜太郎のスマホが鳴る。

舜太郎「もしもし？」

舜太郎の顔がパッと明るくなる。

舜太郎「本当に！？」

走り出す舜太郎。

舜太郎「よっしゃ！」

○大学病院（朝）

○同・病室前（朝）

舜太郎、深呼吸してドアを開ける。

舜太郎「おう、ノブ！」

○山手線・電車内（朝）

心理学のテキストを読みながら電車に乗っている舜太郎。

1両目から最後尾の車両まで、乗客それぞれが行き先をチェックしている舜太郎。

車内の乗客たちの頭上、それぞれバラバラの駅名が浮かんでいる。

ふいに足を止める舜太郎。

リクルート姿の若い大学生らしき青年、ドアにもたれかかり、力なくうなだれている後姿。

舜太郎「……」

舜太郎、青年の肩にそっと手を伸ばす。

【完】